研究テーマ	回復期リハビリテーション病棟におけるテレ・リハビリテーション見学が家族にもたらす影響―群内前後比較研究―

病　院　名	医療法人社団健育会　湘南慶育病院
演　　者	○丸山祥（まるやましょう）（作業療法士）　廣瀬卓哉（作業療法士）　三枝洋喜（理学療法士） 徳丸愛（作業療法士）　松本仁美（理学療法士）　久保雅昭（理学療法士）

概　　要

【研究背景】
現在のCOVID-19流行の影響から面会制限等の感染対策によって、家族とのリハビリテーションの進捗状況や目標共有が困難な状況がある。この問題を解決する一つの手段としてテレ・リハビリテーション(WFOT 2014)の活用がある。当院回復期リハ病棟ではweb会議システムを利用したテレ・リハビリテーション見学（以下、テレ・リハ見学）を実施している。しかしながら、テレ・リハ見学の家族への効果に関する知識は不足しており(Sarfo et al 2018)、今後、テレ・リハ見学を有効に活用するためには、それが家族に効果的かどうかを検討する必要がある。

【研究目的】
本研究の目的を回復期リハ病棟におけるテレ・リハ見学が患者の家族にもたらす影響について検討することとした。

【研究方法】
本研究では群内前後比較試験を用いた。研究対象者は、A病院の回復期リハ病棟に入院した患者の家族34名であった。実施内容は、web会議システムZoom ver5.0.4を用いたテレ・リハ見学（1回40分程度）とその前後の質問紙調査だった。調査内容は、主要指標として、リハビリテーションに対する満足、患者の状態の理解、今後の生活の見通し、副次指標として、介護肯定感尺度から抜粋した。解析はWilcoxon の符号付き順位検定を実施した（有意水準5%）。本研究は、A病院倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：承20-011）。対象者全員に対し研究協力について説明を行い、書面で同意を得た。

【結果】
次の項目で有意な差が認められた；(a)リハビリテーションの満足（効果量: 0.53）、(b)患者の状態理解（効果量: 0.58）、(c)今後の生活の見通し（効果量: 0.39）、(e)世話をすることによる親密さ（効果量: 0.41）、(g)家族（患者）を世話していて、逆に自分が元気付けられたり、励まされたりする（効果量: 0.35）。

【考察】
結果より、リハビリテーションの満足、患者の状態理解、今後の生活の見通し、介護肯定感尺度の2項目に中～大程度の効果量(水本ら2008)を示す変化が認められた。この変化は、web会議室システムを利用したテレ・リハ見学であっても、家族がリハビリテーションに参加する機会となったことで、患者の現状の理解を深め、今後の生活を考える機会として、退院準備に役立った可能性が考えられる(Vloothuis et al 2020)。

【結論】
回復期リハ病棟におけるテレ・リハ見学の家族に対する影響について34名を対象とした群内前後比較研究によって検討した。結果、リハビリテーションの満足、患者の状態理解、今後の生活の見通し、介護肯定感尺度の2項目で良好な影響がみられた。

本研究にご協力下さった患者・家族の皆様、データ収集にご協力下さった病院職員の皆様に感謝申し上げます。